

主 題：信仰者と罪：壊れた関係を修復する7

聖書箇所：コリント人への手紙第二 7章13-16節

テーマ：教会における兄弟姉妹の関係を含め、壊れた関係を修復するためには

今朝、皆さんと見て行きたいのは、Ⅱコリント4：13-16のみことばです。約2カ月にわたって、私たちは信仰者と罪：壊れた関係を修復するというテーマについて、Ⅱコリントのみことばから学んできました。特にパウロとコリントの教会との間に起きた出来事から、壊れた関係を修復するための八つの要素を順に追ってきたのですけれども、それもきょうをもっておしまいです。きょう八つの要素のうち、残りの二つを見ていきたいと思えます。これまでを振り返ってみて、どうだったでしょう？罪によって壊れた関係に対して、聖書的にどのように向き合うべきなのかを自分のこととして考えることができたでしょうか？赦しや悔い改め、愛をもって戒めることや励ますことなど、改めて自分の歩みを見こぼしに照らし合わせて考えることはできたでしょうか？このシリーズを始めるに当たって、最初にも言いましたけれども、私たちは天で主にお会いするその日まで、悲しいことにだれでも罪を持っている以上、この地上にあっては罪を犯してしまうし、それによってだれかを悲しませてしまうことがあります。キリストを信じて救われたからといって、一切の問題がなくなるのではないのです。この先、私たちが兄弟姉妹とともに奉仕や学びをしていけば、ますます相手のことがわかるようになってくるでしょう。教会でともに仕え合っていけば、その関係が深まって、もちろん良い部分も見えてくるようになりますけれども、弱い部分も見えてくるでしょう。私たちが神の家族として、ともに生きていこうとするならば、神様のすばらしさをともに覚えて、そのことを感謝する、そんな場面だけではなく、あなた自身がだれかを傷つけたり、逆にだれかがあなたのことを傷つける、間違いなくそんな場面にも出くわすことでしょう。だからこそ、私たちはそんな関係が壊れる、そんな罪や問題が生じた時に、いつでもみことばから正しく対応できる備えをしていなければいけないのです。願わくは今回見てきたこのシリーズが、皆さんの歩みを改めて吟味する助けと励ましになっていれればと思います。

では早速ですけれども、残された二つの要素を考えてみましょう。まず、いつものようにみことばをお読みします。復習も兼ねて7：5-16までお読みしますので、これまでのことも思い返しなが、それぞれ追ってみてください。

Ⅱコリント7：5-16

「5 マケドニヤに着いたとき、私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまの苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。6 しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テスが来たことによって、私たちを慰めてくださいました。7 ただテスが来たことばかりでなく、彼があなたがたから受けた慰めによっても、私たちは慰められたのです。あなたがたが私を慕っていること、嘆き悲しんでいること、また私に対して熱意を持っていてくれることを知らされて、私はますます喜びにあふれました。8 あの手紙によってあなたがたを悲しませたけれども、私はそれを悔いていません。あの手紙がしばらくの間であったにしろあなたがたを悲しませたのを見て、悔いたけれども、9 今は喜んでいます。あなたがたが悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちのために何の害も受けなかったのです。10 神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。11 ご覧なさい。神のみこころに添ったその悲しみが、あなたがたのうちに、どれほどの熱心を起こさせたことでしょう。また、弁明、憤り、恐れ、慕う心、熱意を起こさせ、処罰を断行させたことでしょう。あの問題について、あなたがたは、自分たちがすべての点で潔白であることを証明したのです。12 ですから、私はあなたが

たに手紙を書きましたが、それは悪を行った人のためでもなく、その被害者のためでもなくて、私たちに
対するあなたがたの熱心が、神の御前に明らかにされるためであったのです。:13 こういうわけですか
ら、私たちは慰めを受けました。この慰めの上にテトスの喜びが加わって、私たちはなおいっそう喜びま
した。テトスの心が、あなたがたすべてによって安らぎを与えられたからです。:14 私はテトスに、あな
たがたのことを少しばかり誇りましたが、そのことで恥をかかずに済みました。というのは、私たちがあ
なたがたに語ったことがすべて真実であったように、テトスに対して誇ったことも真実となったからで
す。:15 彼は、あなたがたがみなよく言うことを聞き、恐れおののいて、自分を迎えてくれたことを思い
出して、あなたがたへの愛情をますます深めています。:16 私は、あなたがたに全幅の信頼を寄せること
ができるのを楽しんでいます。」

○壊れた関係を修復するための八つの要素：

1. 慰めを与えてくださる神様 5－6節
2. 準備されていた恵みの態度 6－7節
3. 愛を伴う罪への戒め 8－9節
4. 神様のみこころに添った悲しみ 8－10節
5. 聖さを生み出す真の悔い改め 10－11節
6. 熱心さを思い出させる愛 12－13節
7. 正しい恐れから生じる従順さ 13、15節

さて、壊れた関係を修復するための八つの要素の七つ目は、正しい恐れから生じる従順さです。これ
までもに見てきたように、パウロによって罪を戒められたコリントの教会は心から悔い改めました。だ
からこそ、その歩みのうちにさまざまな変化が生じるようになっていたのです。そして、その一つに従
順さというものが現れるようになっていました。実際にどうということなのかが、特に13節と15節に
記されています。13節をもう一度よく見てください。「こういうわけですから、私たちは慰めを受けま
した。この慰めの上にテトスの喜びが加わって、私たちはなおいっそう喜びました。テトスの心が、あな
たがたすべてによって安らぎを与えられたからです。」と述べられていました。ここでまず目をとめてほしいのは、
パウロが「私たちは慰めを受けました」と口にしていたことです。彼がこの「慰め」ということばを用い
たのはここだけではありませんでした。例えば6節でも「しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テ
トスが来たことによって、私たちを慰めてくださいました。」と、こんなふうに「慰め」ということばを用
いていました。また続く7節の頭のところに、「ただテトスが来たことばかりでなく、彼があなたがたから
受けた慰めによっても、私たちは慰められたのです。」とあります。

ここまで5－13節の内容を一緒に見てきましたが、このたった9節の間に、パウロは実に5回も
「慰め」ということばを用いていました。これだけで彼自身がどれほど慰めを受けていたのか、どれほ
どコリントの兄弟姉妹が悔い改めたことに安堵していたのか、その様子が想像できません？当初、罪を
戒める手紙を書き送った時にあった恐れや不安、愛するコリントの人たちが書き送った自分の厳しいこ
とばにどう応答するのかわからなかったからこそ、パウロは返事を待っている間、一切の安らぎを抱く
ことができなかつたのです。彼は落ち込んでいました。でも、そんな落ち込んだ彼のうちに神様が慰め
を与えられ、そして何より彼がずっと願っていたコリントの教会が、真の悔い改めをし、自分との関係
を回復したいと熱心に望んでいることを聞かされて、パウロの心に大きな喜びや賛美があふれるよう
になっていたのです。パウロはとてつもない大きな安堵を覚えて、神様に感謝していたでしょう。あれだ
け頑なだったコリントの人たちが変わったのだ、神様がその心を変えてくださった、本当に良かった
と。そして今は自分との関係を回復したいという熱意を持ってきている、そのことは本当に感謝だ
と、パウロはそのことによって慰めを受けました。

でも、彼がここで慰めを受けて喜んでしたのは、それだけが理由ではありませんでした。パウロは13節の後半の部分で「この慰めの上にテトスの喜びが加わって、私たちはなおいっそう喜びました。テトスの心が、あなたがたすべてによって安らぎを与えられたからです。」と続けていました。パウロがより一層喜んでいた理由は、彼自身が慰められただけではなくて、手紙を託して遣わしたテトスも、コリントの兄弟姉妹たちによって安らぎを与えられていたことです。テトスが喜んでいたからこそ、パウロも同じようになって喜んでいたので。これだけ聞いても、この状況に関して、私たちは余りびんと来ないかもしれない。でも少し立ち止まって、テトスの立場を考えてみてください。このテトスという人物は、パウロが記した厳しい手紙をコリントの教会に、コリントの兄弟姉妹のところに直接持って行った人物でした。彼は当然行く前からパウロとコリントの間に何が起きているのかをわかっていたでしょう。パウロが自分の書いた手紙に対して彼らがどう応答するのかわからない、そんな大きな苦悩や葛藤を覚えていることももちろんテトスは知っていたでしょう。それだけではなくて、以前パウロが彼らからひどい扱いを受けて、大きく傷つけられたこともテトスは知っていたでしょう。それに加えて、今から自分が行こうとしている教会は、実際に分裂が起り、にせ教師たちに惑わされていて、いろいろな罪が蔓延している場所だったのです。彼はそのことをある程度は知っていたでしょう。そんな場所に直接手紙を届けに行こうものなら、自分がどんな扱いを受けるかわかりませんでした。テトスの立場になったらそれだけでも恐ろしいと思いませんか？でも、懸念事項はこれだけではなかったのです。実を言うと、パウロだけではなくて、恐らくあのテモテもコリントの教会によって、以前ひどい扱いを受けたことがあったと考えられています。そのことに関してIコリント16:10-11にこんなことばが記されていました。「:10 テモテがそちらへ行ったら、あなたがたのところで心配なく過ごせるよう心を配ってください。彼も、私と同じように、主のみわざに励んでいるからです。:11 だれも彼を軽んじてはいけません。」と、パウロはコリントの人々に対して、テモテのことを軽んじてはならないと戒める必要があったのですが、ある註解者は実際、彼らからひどい扱いを受けたからこそ、テモテは彼らのもとを訪ねる勇気を失ってしまい、その代わりとしてテトスがパウロの使者として遣わされることになったのではないかと考えていたりもします。

いずれにしろいろいろな事情をある程度把握していたテトスは、間違いなく不安や恐れを抱いていました。彼はパウロと同じように、教会から拒絶されて辱めを受けるだけではなくて、もしかしたらパウロから遣わされてきた使者だということで、暴力を受ける可能性すらあったのです。もちろんパウロもこれまで見てきたように、安らぎを失うことがありました。でも、コリントの人々を直接訪れるテトスこそ、その道中、心に安らぎを失っていたということは容易に想像できるのです。もしテトスの代わりにそんな場所に行くとしたら、私たちはどんな思いを抱くでしょう？テトスはそんな不安や恐れ、そんな懸念を抱えていたのです。でも、そんな懸念を抱えていた教会にあって、感謝なことにテトスは受け入れられ、そして彼らから慰めを受けたのです。コリントの教会は、ここで正しい恐れから生じる従順さをもって、自分たちが悔い改めたことを明らかにしていました。

そのことが15節のところに「彼（テトスのこと）は、あなたがたがみなよく言うことを聞き、恐れおののいて、自分を迎えてくれたことを思い出して、あなたがたへの愛情をますます深めています。」と書かれています。かつてパウロの言うことにさえ耳を傾けようとしなかったコリントの教会の人たちが、テトスの言うことをよく聞いて、彼を迎えました。間違いなくテトスは驚いて大いに感謝していたでしょう。でも、一体どうしてコリントの兄弟姉妹たちは、そんな態度を取ったのでしょうか？ここで鍵になるのが、パウロが15節で用いていた「恐れおののいて」という表現です。この表現は、「恐れ」と訳されている“フォボス”というギリシャ語と、「おののいて」と訳されている“トロモス”ということばが二つ合体して成り立っている表現です。前者の「恐れ」と訳されている“フォボス”ということばは、広い意味で用いられて、例えば危険に直面した時の恐れやおびえ、警戒を表したり、また逆に神様

の前で抱く畏敬の念や尊敬を表したりできることばです。また「トロモス」という「おののいて」と訳されていることばは、「恐怖から生まれる震え」であったり、「身ぶるい」を表わすことばが使われています。そして、この二つのことばを組み合わせて「恐れおののいて」となっているのです。もっと言えば、人がだれかや何かの前で恐れや畏怖を覚えて震えている様子を表しています。聖書の中ではよく神様とそのみわざを前にして、人がふさわしく抱く恐れや畏敬の念を表しています。

例えばこの表現は、パウロがピリピ2章のところでも用いていました。ピリピ2：12に「そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい。」と、ここに「恐れおののいて」という同じことばが使われていました。もう少しわかりやすい例としては、旧約聖書の中でもこんなふうに使われています。例えば出エジプト15：11-12、また16節を見れば、「：11【主】よ。神々のうち、だれかあなたのような方があるでしょうか。だれがあなたのように、聖であって力強く、たたえられつつ恐れられ、奇しいわざを行うことができますでしょうか。：12あなたが右の手を伸ばされると、地は彼らをのみこんだ。……：16 恐れとおののきが彼らを襲い、あなたの偉大な御腕により、彼らが石のように黙りますように。」とあります。また、イザヤ19：16には「その日、エジプト人は、女ようになり、万軍の【主】が自分たちに向かって振り上げる御手を見て、恐れおののく。」と。ですから聖書が教えていることは明白でした。罪を持った者が聖く正しい神様の偉大さを前にした時に、そこには当然の応答として、恐れというものが現れるということです。

もちろん、これは救われた者たちが救われた後も、永遠のさばきや苦しみに対していつまでも恐れを抱くという恐れではありません。みことばは救われた者が罪に定められることはもう二度とないとはっきりと約束を与えてくれていました。例えば、ローマ8：1に「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」という約束が与えられています。ですから救われた者たちは、永遠のさばきを恐れるものではありません。でも同時に、救われた者たちは、神様を悲しませるのではなくて、神様にふさわしい栄光をいつも帰すことができるように、正しい恐れを抱きながら歩んでいこうとします。神様に対して畏敬の念を持って歩んでいこうとするのです。こんな主に対する恐れが、弱く愚かな私たちを誘惑や罪から離れさせ、神様とみことばに対して従順な生き方を生み出すのです。

ここでコリントの兄弟姉妹たちが覚えていたものも同じでした。彼らは自分たちのもとにやって来たテトスを軽く扱おうとはしていませんでした。なぜそれをしなかったかという、それはやって来たテトスがパウロから遣わされた使者であって、パウロからみことばを携えて来たことを、彼らが正しく把握していたからでした。言いかえれば、彼らはもし自分たちがテトスを雑に扱えば、自分たちがほかのだれでもない神様の前に申し開きをしなければならないことに気づかされていたということです。彼らは人ではなくて神様を恐れしました。だからこそ、彼らはテトスのことばによく耳を傾けました。正しく神様を覚えたからこそ、正しく神様の存在を恐れたからこそ、彼らは恐れおののいてテトスを迎えていたのです。そして、テトスがもたらしたその手紙に彼らは従順に従いました。そんな従順さが、彼らが本当に悔い改めたことのあかしでもあったのです。テトスはそんなコリントの人たちの姿を目の当たりにしました。彼らが厳しい手紙に対して、それを拒絶したり、それに対して言い訳をしたりするのではなく、神様のことを恐れて、神様に従いたいという思いから、そのことばに喜んで従おうとしている姿を見たからこそ、テトスは喜んだのです。テトスは慰められたのです。

またそれだけではなく、テトスは彼らに対して愛情も抱いていました。15節の最後のところに「自分を迎えてくれたことを思い出して、あなたがたへの愛情をますます深めています。」と書いていました。ここで「愛情」ということばが用いられていました。このことばは、概要欄にも載っていると思いますが、人のからだの内側の部分である「内臓」という意味も持っています。多くの場合、このことばは感

情や愛、また何よりも人の中心である心を表わすのに用いられるものです。つまり、テトスが持っていた愛情、テトスがコリントの人たちに対して抱いていた愛情は、彼の心からあふれ出す愛だったので。テトスは、コリントの人たちがパウロのことばに従順に耳を傾ける様子を目の当たりにし、彼らに対して愛を覚えました。そして、その愛は自分を迎えてくれた時だけ覚えた愛ではなくて、「自分を迎えてくれたことを思い出して、あなたがたへの愛情をますます深めています」と、その後も、その状況を思い出すたびに、彼らの顔を思い出すたびに、彼らに対する愛情をますます深めていたということです。それは、私たちもよく理解できますよね？なぜならどうなるかわからないと、恐れや不安を持って行ったのです。でも、そんなテトスをコリントの教会の人たちは受け入れました。そのことに対して、彼はコリントの人たちに対する愛を覚えていました。いろいろな不安を覚えていたテトスの心は、こうやって安らぎ、喜び、そして愛にあふれるようになっていたということです。

さて、このことから皆さんに覚えてほしいこと、注目してほしいことは、真に悔い改めたコリントの教会には、やっぱりその歩みに変化が見られたということです。もっと具体的に言うのであれば、彼らのうちには正しい恐れから生じる従順さというものが生まれていたということです。以前7：10-11で、私たちは悔い改めについて詳しく見たのですけれども、真に悔い改めた者は、自分の過ちを単に認めてことばだけで終わるものではなかったのです。コリントの人たちは、そんな悔い改めをしていたわけではありませんでした。彼らは神様の聖さを覚えて、正しい恐れを抱いたからこそ、神様の前を忠実に歩もうとしたのです。自分たちは間違っていた、でも、今は神様の前を正しく歩んでいきたい、従順に歩んでいきたいと。だから自分がしなければならないことを教えてほしい、確かに厳しいことばだけれども、自分たちが聞かないといけないことを教えてほしい、それに喜んで従いますと。それが変えられたコリントの人たちが示した態度でした。そしてこんな悔い改めの態度を見たからこそ、テトスは大いに慰められたのです。テトスは大いに喜んでいたので。そして何よりそんなテトスの喜びによって、パウロの心にも一層の喜びが満ちあふれていました。

だとすれば、私たちが考えなければいけないことは、私たちの悔い改めというものが一体どのようなものかということです。私たちの悔い改めは神様に対する正しい恐れから生じる従順さを生み出しているのでしょうか？神様の前に自分自身がしてきたことを覚える時に、聖い神様を覚える時に、この方に対して畏敬の念を抱くからこそ、みずから進んで罪を離れて、みことばに対して、主に対して従順に歩もうとしているのでしょうか？それとも素直に罪を認めて従うのではなくて、言い訳をしたり、自分の正しさを証明しようとしたりすることに心がとらわれてはいないのでしょうか？コリントの人たちは、確かにその心が砕かれました。だからこそ、彼らは正しい恐れから生じる従順さをもって、テトスに応答したのです。そして、これが壊れた関係を修復するための七つ目の要素でした。

8. 神様に確信を置く信頼 14、16節

そして最後に、壊れた関係を修復するための八つ目の要素として挙げられるものは、神様に確信を置く信頼です。残りの14節、16節にこのようなことが記されていました。もう一度14節を見ていただくと、「私はテトスに、あなたがたのことを少しばかり誇りましたが、そのことで恥をかかずに済みました。というのは、私たちがあなたがたに語ったことがすべて真実であったように、テトスに対して誇ったことも真実となったからです。」と書いていました。さて、ここにはすごいことが書かれていました。パウロはまず「私はテトスに、あなたがたのことを少しばかり誇りました」とコリントの兄弟姉妹たちに対して告げていたのです。パウロはコリントの兄弟姉妹たちのことをテトスに誇っていたのです。パウロは、彼らのことを自分のことのように誇りに思っていました。でも、一体どういうことでしょうか？少し情景を考えてみてください。先ほど見たように、テトスはパウロから手紙を託されて、コリントの教会へと向かう準備をしていました。テトスは今から自分が向かう場所が、どんなに困難な状況なのかということをおおよそ知っていたからこそ、旅立つ前の彼は不安や恐れを覚えていたでしょう。厳しい旅になるのだと、

心が騒いでいたでしょう。パウロはその彼の様子をわかっていました。だからこそ、そんな状態にある彼のことを安心させるために、パウロはコリントの兄弟姉妹たちのことを誇って、テトス、心配ありません、彼らは大丈夫です。彼らはキリストの福音を受け入れて、神様の恵みを受けた者たちなのです。私は彼らのことを初めから知っているし、彼らがどんなふうに進んできたのかも知っています。確かに今は頑なだけど、必ず神様が働いて、彼らはあなたのことを快く受け入れてくれる。だから心配しないでいい、彼らは必ず正しいことをする。だから行っておいでと、パウロはテトスのことを送り出したのです。彼はためらうことなく、コリントの人々が正しい応答をすると確信して、テトスに保証を与えていました。そしてその結果、どうなったかという、パウロは「そのことで恥をかかずに済みました」と言っていました。つまり、コリントの兄弟姉妹たちは、パウロがテトスに誇ったように、テトスのことを受け入れたばかりか、自分たちの罪を心から悔い改めて、神様の前に熱心さをもって歩む者へと変えられていたのです。七つ目の要素でも見ましたけれども、彼らは従順にそのことに応答していたのです。彼らはパウロが信じて誇ったとおりに、主の前に喜ばれる正しい応答をしました。だからこそ、パウロは恥を見ることがありませんでした。だからこそ、パウロは大いに慰められ、喜んでいたのでした。

でも皆さん、ここで立ち止まってよく考えてみてください。この時点ですごいと思いませんか？なぜならパウロほど彼らによって何度も何度も傷つけられて、裏切られて、彼らの罪によって悲しませられた人物はいなかったのです。コリントの兄弟姉妹たちは教会が誕生する前から、1年半という時間をともにして自分たちに愛をもって仕えてくれたパウロのことを忘れてしまって、後から突然入り込んで来たにせ教師たちを受け入れていました。また、そんなにせ教師たちが流すありもしないうわさやうそ、非難を問題視して、パウロのことを擁護するのではなく、そのまま偽りを受け入れて、彼らと一緒にあってパウロのことを侮辱していたのです。それに加えて、コリントの教会の中には、分裂や分派が起こっていたり、異邦人のうちにも見えないような不品行が蔓延していて、霊的賜物を自分の益のために乱用しているような者もいれば、主の晩餐を汚すような者もいました。ありとあらゆる問題にあふれていたのです。パウロ自身も大きく傷つけられることもありました。パウロは一体どうしてこんな彼らのことを確信にあふれて信じることができたのでしょうか？なぜパウロは疑いを覚えたり、彼らに対するあきらめの気持ちを抱いたりしなかったのでしょうか？もし私たちがパウロの立場だったら、テトスを送り出す時にどんなことばをかけていたでしょう？コリントの教会のことを誇りに思ったのでしょうか？

この14節が教えているすごいことは、それだけではありませんでした。続きに「そのことで恥をかかずに済みました」と書いていました。その後「というのは、私たちがあなたがたに語ったことがすべて真実であったように、テトスに対して誇ったことも真実となったからです。」とあります。ここで考えてみてください。もしパウロがテモテに誇ったことがそのとおりになっていなかったとすれば、どうなっていたと思います？彼はもちろん大きな恥をかくことになりました。それだけではなく、大きな問題を抱えることになっていました。一体どんな問題かという、それはパウロ自身が人々からの信頼を失うということでした。パウロはいつも真理を語っている、いつも真実を語っているという評価を失うところだったのです。テトスに対して語ったことが真実でなかったと、もしコリントの人々に知れわたれば、彼らの中のある人たちは「なんだ、パウロのことばだって信頼できないものもあるのか」と必ず言うでしょう。では、彼がこれまで、私たちに語ってきた神様のこともすべてが真実ではなくて、幾つかは誤りがあるのかもしれないと。そしてもしそうなっていったら、間違いなくパウロの評判を落とそうとしていたにせ教師たちは躍起になって、ほらパウロは信頼できないでしょうと、その人たちにとっての格好の餌食になっていたでしょう。

でも実際にそうなることはありませんでした。パウロがコリントの人々に最初から語ってきたことが確かにすべて真実であったように、テトスに対して誇ったこともまさにそのとおりの真実のこととなったのです。どんな時も真理を語るという、そんなパウロのあかしが失われることはありませんでした。こ

れを聞いてさらに思いませんか？一体どうしてパウロはそこまで確信にあふれて、コリントの人たちを信頼できたのだろうと。どうして自分を傷つけ、悲しませた者たちのことをここまで誇ることができたのだろうと。自分のあかしを失うような危険を冒してまで、彼らのことをどうして信じられたのだろうと。そしてそんなパウロが最後16節でもまとめて言っていたのです。「私は、あなたがたに全幅の信頼を寄せることができるのを喜んでいます。」と。一体どうしてパウロは彼らに対して全幅の信頼をすることができたのでしょうか？これが、私たちが学ばなければならないことになります。それは、パウロがほかのだれでもない神様に確信を置いていたからでした。彼はたとえ相手がどんな状態であろうとも、神様が働かれれば、必ずその人は変えられるという確信を持っていたのです。そしてその神様に対する揺るがぬ確信がパウロのコリントの人々に対する信頼の基盤となっていました。

だからこそ、パウロは彼らによって悲しませられたとしても、彼らが変わることをあきらめたり、彼らが罪から立ち返ることに対して希望を捨ててしまったり、彼らのことを見捨てることはありませんでした。彼の信頼が神様に根差していたからこそ、コリントの人々がどれほど自分を傷つけようとも、どれほど繰り返し罪を犯していたとしても、その信頼は変わることはなかったのです。パウロはいつも神様に信頼を置いていたからこそ、神様が働かれれば変わるのだと確信を置いていたからこそ、いつも彼らの最善を願っていました。思えば、まさにこれこそが愛なのだと言われているパウロが教えていることを知っていますよね？パウロはIコリント13：7でも、愛について列挙している中において、愛というのが「すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。」と最後に記していました。パウロはそうにして、神様を信じ、コリントの人たちに対して信頼を置いていました。そしてこのような神様に確信を置く信頼というのは、パウロにとってもそうですけれども、私たちの歩みにとっても大切なものであることは言うまでもありません。兄弟姉妹たちの間において、互いに信頼するということは欠かせないものになるのです。

皆さん、実際はどうでしょうか？果たして私たちはパウロが実践していたような、いつも信じるという愛を互いに実践しているのでしょうか？恐らく多くの人々がほかの人を信じるということに難しさを覚えることがあったりするでしょう。例えば、周りの人が口にしたことに対して、いつも心の中で、いや、それはできないでしょう、そんな疑いを抱いているかもしれません。ある人が約束をしても、それを約束どおりに果たせるかどうかをいつも心の中で疑っているかもしれません。また逆に、ある人がいつも失敗や過ちを犯すことを信じているかもしれません。以前にだれかを信じて裏切られて失望させられれば、確かに信じることに難しさを覚えることがあったりします。そのような過去の経験が、相手がいつも本当の自分というものを偽っているのではないか、隠しているのではないか、そういった疑いにつながってしまうこともあります。そして私たちがもう傷つきたくない、自分自身を守ろうとすれば、相手を知ることをやめようとするかもしれません。その結果、私たちが自分を守るために相手のことをいつも疑い始めたらどうなるかという、そうすれば、相手との関係を築くことが当然難しくなるのです。そんな経験、これまでにしたことはないでしょうか？

またある人はこういった疑いではなくて、余りにも何度も繰り返し罪を犯す人に対してあきらめを覚えているかもしれません。何十年にもわたって同じように繰り返し犯されている過ちを見れば、いやいや、もうこの人は絶対に変わらないと、希望を失っているかもしれません。こうして私たちが信頼することにはいろいろな難しさが確かに存在します。でも、私たちが覚えなければいけないこと、私たちに対してパウロが教えてくれていること、みことばが教えていることは、神様がその人のうちに働かれれば、どんな人であろうと変えられると、私たちもいつも信じるということです。私たちは神様にあって、どんな時も信頼することができるというのです。そして、もし私たちがもうあの人をだめですと疑って、あきらめを覚えていたり、希望をみずから捨てているのだとすれば、私たちはその人に対

してだけではなくて、神様に対して疑いを抱いていることと同じだということです。神様への望みを捨てているのと同じだということです。

なぜかという、それはあの人はもう絶対に変わりません、あの人はもうだめですと私たちが心に思う時に、私たちは神様、あなたにも彼のことを変える力はありません、あなたでも彼のことを変えることはできません。彼女の罪深さを覚えた時に、あなたが働くその力でさえもそれはできません、あなたの働く力よりも、彼女の罪深さの方がはるかに大きいのですと言っているのと同じことになるからです。でもどうなのでしょう？私たちのような者を罪の中から救い出すことのできた神様の力は、同じように罪の中に死んでいる者を助け出す力がないのでしょうか？私たちのうちに良い働きを始めてくださって、キリストの日までに完成させてくださると約束して下さった方は、ほかの信仰者のうちにも働いて、同じように変える力がないのでしょうか？もちろんそうではないのです。だからこそ私たちが信頼することに難しさを覚えるのであれば、思い出すことです。私たちを救い出してください、今も変わらずに私たちのうちに働いてくださっているその方の恵みの力がいかに偉大なものなのかということを感じることです。私たちが自分の罪と罪過の中に死んでいた時に、私たちをそこから救い出してくださいしたのは、ただ主の恵みでした。私たちが創造主なる神様に逆らって、罪の奴隷として頑なに忌み嫌われることを行っていた時に、私たちを義の奴隷として生まれ変わらせてくださったのは、ただ主の恵みでした。私たちがどれだけ人の目に良いと思われることをしようとも、絶対にどうすることもできなかった罪の問題を、私たちの代わりに十字架で贖ってくださったのも、ただ主の恵みでした。

本来であれば、神様の怒りは、私やあなたの上に注がれるべきものでした。しかし、その怒りをキリストが十字架の上でなだめてくださったのです。私たちが受けるべきその罪の罰を背負って、罪に対して燃え上がる神様の怒りをこの方が耐え忍んでくださいました。そして、この方が代わりに死んでくださり、3日目にその死からよみがえったからこそ、この偉大な救いのみわざを通して、神様はご自分のもとに悔い改めと信仰を持ってやって来る者に罪の赦しというものを与えてくださったのです。イエス・キリストの十字架こそが、私たちにはどうすることもできなかった罪の問題を、神様が解決してくださったその愛の表れでした。救いは始めから終わりまで、そのすべてが主の変わらない恵みのわざだったのです。パウロはエペソ2：4-5でもはっきりと述べていました「:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——」と。私たちを救ってくださったのは、ただ神様の恵みの力でした。ですから、もしまだこの中にこの恵みの力を知らない方がいるのであれば、イエス・キリストを自分の救い主として受け入れていない方がいるのであれば、どうかきょう、この方を自分の主として、自分の救い主として受け入れてください。みことばは、人には必ず一度死ぬことと裁きを受けることが決まっているとはっきりと教えています。ひとりひとりが神様の前に立つ日は必ずやって来ます。この聖い神様は罪を見て見ぬふりをするお方ではありません。必ず正しいさばきを与えられます。でも、私たちにはこの神様からの救いが用意されているのです。イエス・キリストの十字架に、神様はその愛を表してくださいました。この方が私たちの代わりに死んでくださったからこそ、この方のうちに私たちは救いを見出すことができるのです。ですから、どうか自分自身の罪を悔い改めて、そしてこの方を信じ歩む人生をきょうから始めてください。救いは恵みでした。

でも、同時に私たちが知っていることは、救いだけが恵みによって与えられたものではなかったということです。救われた後、信仰者として歩いていくその力も、もちろん主の恵みでした。この点に関しても、パウロはこう述べています。Ⅱコリント12：9に「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」と。その生涯において、数多くの迫害や困難を経験し、苦しんだパウロを支えるのに十分だったもの、それこそ主の恵み

の力でした。そして感謝なことに、この同じ主の恵みの力が今の私たちにも与えられているのです。だとすれば、私たちはたとえ兄弟姉妹がどんなに罪を犯していたとしても、いつまでも頑なであったとしても、神様が働かれることを信じて、変わらずに期待することができます。たとえ私たちの目にはどんなに難しく思えるような状況でさえも、罪人を救う力である神様の恵みの力が働けば、その状況は変えられるのだと希望を持つことができます。神様が働かれれば、どんな頑なな罪人も変えられる。周りの状況や人ではなく、私たちは、この神様のなされることに期待を置き続けることができます。神様がおられる限り、私たちはいつまでもあきらめることなく、希望を持ち続けることができます。パウロはまさにそうでした。コリントの兄弟姉妹たちは、何度も何度も彼を悲しませました。大きな傷を負わせました。罪を戒めようとしても、彼らは変わろうとせず、かえってパウロのことを拒絶しました。しかし、そんな頑な彼らに対しても、神様が働かれれば必ず変えられるとパウロは確信していたのです。そしてその確信こそ、その信頼こそ壊れた関係を修復するための最後の八つ目の要素となるものでした。

〇まとめ

さて、私たちはこうして壊れた関係を修復するための八つの要素を順に見てきました。どうだったでしょう？慰めを与えてくださる神様や準備されていた恵みの態度、愛を伴う罪への戒めや神のみこころに沿った悲しみや、聖さを生み出す真の悔い改めや熱心さを思い出させる愛や正しい恐れから生じる従順さや神様に確信を置く信頼。どの要素もそれぞれの歩みにとって非常に大切なものでした。果たして私たちは、このみことばが教えていることを、それぞれの歩みの中で実践しながら成長しようとしているでしょうか？

最後に皆さんに覚えていてほしいことがあります。それは、これまで見てきたように、確かにパウロはコリントの兄弟姉妹との間に大きな困難を抱えていました。しかし、彼は、彼らに対する変わらぬ愛をもって、その関係を回復することを追い求めていたのです。パウロは犠牲を払って熱心に同じ神の家族である、その者たちとの関係を大切に扱おうとしました。また、これは罪を犯したコリントの人々も同じでした。罪によって頑なになっていた時は、確かに見えなくなっていましたけれども、でも心から悔い改めた後は、彼らはパウロとの関係を回復したいと熱心に追い求めていたのです。彼らにとっても同じ神の家族との関係は欠かせない大切なものでした。

では果たして私たちは、兄弟姉妹との関係を同じように考えているでしょうか？皆さんにとって同じ神様の家族として生きている者との関係は、一体どのようなものでしょうか？救われた者はみな同じ主を愛する者です。今はもうただキリストにある信仰によって一つとされました。そしてそんな一つとされた者が、私たちを一つとしてくださったキリストの福音を生きて、そのすばらしさをあかしとして宣べ伝えていこうとするのです。悲しいことに、私たちは互いに罪を犯して、相手を傷つけてしまうこともあります。関係が壊れてしまうこともあるでしょう。私たちは互いに成長しなければならない部分がたくさんあります。でも、それでもなお神様は互いが互いを必要とする者として、同じ一つの神の家族に私たちを召してくださいました。だからこそ互いにキリストの愛をもって、それぞれの成長に欠かすことのできない神様と、そして兄弟姉妹との関係を熱心に求める者として、ますますともに成長していきましょう。